

お春

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

九 白雪と紅薔薇

十一月の末、感謝祭も間近くなつた頃、下山一家の生計がいよゝ／＼行き詰りといふ所まで來た。さしも貧窮と、きはよい不安の中に、生れ育つた連中でも、一進も三進も行かなくなつたのである。

河崎村の人達は、下山一家の者を、その生國へ歸さうと努めた。子供達が、どうにか、獨立するやうになるまでの世話、生れた土地がすべきで、移住して來た村の責任ではない、といふのであつた。下山のおかみさんは、それでも、力一杯働くのだが、家内には食物もあまりないし、着るものなどは、尙更、無かつた。それで、子供達は、食事時になる迄、近所の家の勝手口の外に、大人しく腰を下ろして、食欲を充たさうとした。一體が、あまりに人に可愛がられない子供達なのだが、それでも、親切氣のあるおかみさん達から、不用の食物を貰つたりした。

十一月になつて、天氣は寒く陰氣になるし、近所の家では、感謝祭の御馳走に使ふ七面鳥が肥え太り、南瓜や玉黍蜀が納屋に入つて居るのを見ては、下山の子供達も、自分等が身の上をつく／＼味氣なく思つて、何か、金のかゝらぬ面白い事はないかを探しまはつた末、石鹼を賣つて賞品を貰ふ事を思ひ立つた。實は、此夏の末に、近所の人々に少しばかり賣つて、玩具みたやうな手押し車を一つ會社から手に入れたのであつた。

その車は、可なり「やにつこい」代物だったが、田舎道を押して行けない事もなかつた。子供達は、親譲りであらうか、商賣にかけては抜目がなくて、こんどは、その手車を利用して、石鹼販賣の範圍を廣め、近くの村々へまで行つて見やうとするのだつた。石鹼會社は全國に居る幼年賣子には、極少しの利金しか呉れない金だが、相當の數を賣つたものに贈呈するといふ品物を、美しい挿繪入りにして廣告して居るので、下山の子供達は、すつかり乘氣になつてしまつた。そして下山のお倉とすうちやんが、お春のところへ相談に行つたため、お春までが一も二も、なくそれに大賛成をしてしまつて、自分はもとより、金子しまさんもきつこ手傳ふと約束した。

さて、その賞品の中で、手に入りさうなのが三種いっしょあつた。本箱ミブラン天の寢椅子と、置ランプとなのだが、下山家には書物は一冊もないし、それから椅子なんかは不要と子供達はさつさと定めてしまつて（七人も家族があるのだから、役に立ちさうにも思へるのに）唯もう置ランプを何よりもよくて食物よりも着物よりも欲しいものにしてしまつた。お春にしろ、おしまにしろ、下山の者が置ランプを欲しがるとを不似合だとも考へなかつた。そして二人で、置ランプの挿繪を眺めては、もし自分が獨立で賣子になるなら、どのやうにでも骨を折つて、石鹼を賣りに賣つて、そのランプを賞品に取り、此冬は、その光の下でくらせるにと考へたりした。廣告の文で見ると、高さが八尺程に思はれるので、おしまは、お倉に山の家の天井の高さを測つて見たらよからうといつた。しかし但し書の中に、相當の臺（定價三圓）の上に載せると、高さが二尺五寸としてあつた。ピカ／＼の眞鍮製であるが、純金と見まがはれる事請合で、それに附屬してゐる傘（石鹼を更に百個賣り上げた場合に進呈）は、縮緬紙で出來てゐて、色彩は十二種もあるから、貰ふ人は、好みの色を選びうると書いてあつた。

下山のシーソーは、この組合に加入してゐなかつた。お倉は、割合によく賣つたが、舌たらずのすうちやんは、大した儲をし得なかつた。それから、双生児の兄弟は、手離しには出されぬ程年が行かないので、六個位、もたせて、おまけに、

一箱いくら、一ダースいくら、一個いくらと、値段付を添へてやらなければならなかつた。お春と、おしまは、二人で、どこかの方面へ二三哩出ていつて、白雪石鹼と紅薔薇石鹼との賣れ口がどんなものか試めして見やうといつた。白雪は、洗濯用ので、紅薔薇は化粧用のであつた。

二人はいそぐと出掛ける準備にかゝり、おしまの家の、屋根裏の室で、長い相談をした。賣つてあるく言句を定めるのに、會社の廣告を参考にしたが、それよりもつこ助けになつたのは富田町の市場で、藥賣りの言ひ立て、ゐた文句を、記憶してゐた事だつた。その男のやり振りは、一度見たら忘れられるものではなかつた。おしまがお春を御客に見立て、言つて見、お春は、おしまに向つて言つて見た。

「今日は、石鹼の御入用はございますまいか。白雪と申すのと、紅薔薇と申すのとで、飾り函に六個人つて、白雪の方がたつた二十錢、紅の方が二十五錢。成分にはすこしも混りものなし。もし御好みなら、御病人が御召し上つても、美味しくて御ためになります。」

「一寸お春さん。それをいはない事にしませうよ。なんだか馬鹿みたやうな氣がするわ。」と、おしまは葉々しく遮つた。

「なんでもない事で、あなたは、ちきに、馬鹿見たやうな氣がするのね。だから、私、時々、あなたは、ほんとの馬鹿なのかと思ふわ。私や、そんなに安つほく馬鹿見たやうな氣にならない。ぢや、厭ならその食べてもいゝつてとこは止してその先を御言ひなさいよ。」とお春は、たしなめた。

「白雪は、極上の洗濯石鹼で、これに越す品は無からうと存じます。御召物を、水に浸けて、一番汚れたところへ、この石鹼をかるく塗つて、朝から夕方まで、水に浸けたまゝにしてお置きになるとどんな赤ちやんでも、造作なく、お洗濯が出来ます。」

「赤ちやんでないのよ。赤子なの。」と、お春は、廣告を参照しながらいふ。

「どつちだつて同じよ。」と、おしまが辯じた。

「それや同じ事だけれど、赤ン坊の事は、廣告なんかでは、幼児ミか赤子とかいふのよ。詩にかく時だつてそうよ。あなたた幼児つていふ方が好き？」

「いゝえ。幼児なんて猶いやだ。だがね、お春さん、廣告の通りに一度して見た方がよくはない。下山の生兒に洗濯させて見ませうか。」

「一體、赤子が、こんな石鹼を使つたつて、お洗濯なんか出来るものぢやないわ。だけど、ほんとでなくちやかうやつてこうに書き立てる譯がないから、私達そんな心配はしないで置ませう。まあ、面白いわね！ 私を知らないごこの家へ行つて……私怖くはないから……この長文句を述べ立てるのよ……病人の事も……赤子の事もみんな。」

以上の談話は、ある金曜日の午後、金子おしまの家で交はされたのである。お春の伯母達が、舊友の葬式に列するために遠いところへ出かけたので、お春は、三日間おしまの家へ泊りに来て居たので、この子の喜びは限りを知らぬ程だつた。

土曜日が丁度休み日にあたつたので、二人は、老いた馬をつけた馬車を驅つて、三哩先の北河崎村へゆき、おしまの親戚のところで中食をして、四時にはキッチンと歸つてくるといふ豫定だつた。

二人で、金子のおかみさんに、北河崎への行き歸りに、四五軒の家へ寄つて、下山家のために、石鹼を賣つて来てもらひかき訊いたとき、おかみさんは、初めのうちは、さうしても不可いけなといつてゐた。しかし子供には甘い親なので、おしまが、そんな珍らしい事をして遊ぶのに、何の異存もなかつたのだが、さうだかど危ぶんだのは、氣むづかしいおみね伯母さんの姪のお春のためだつた。しかし、その催しは、慈善のためなのだといふ事が解つたので、やつと同意してくれた。

二人の少女は、雜貨店へいつて、石鹼の大箱をいくつか、下山のお倉の支拂ひにして、借り受けた、それから、その代物を、馬車の後部に載せて、嬉々として、二人は、田舎道を急いだ。晴れ渡つた秋日和で、感謝祭が間近にせまつて居るなどとは思はれなかつた。ガサ／＼と風の鳴る日であり、紅に褐こげに、黄に赤に、青に深紅の日であつた。櫛かじにも楓にもまだ葉が残つてゐて、緋と褐と黄金との錦を織つてゐた。空氣は、きび／＼と肌觸りよく、野といふ野には、黄色く赤く林檎が山をなして、納屋、醸造所、市場へと運ばれるばかりになつてゐた。馬車を曳いてゐる老馬も、二十歳といふ年を忘れて、匂よい空氣を吸ひ、子馬のやうに走つた。山は遠くに、碧く、くつきりと見えてゐた。お春は、馬車の中に立ち上り、生の悦びに堪えられなくなつて、目前の景色に呼びかけた。

大きく廣く美しく莊大な地よ、

御前のぐるりには漫々と水がとりまいてゐる、

御前の胸にはすく／＼草が生ひ茂つてゐる、

地よ、御前は、美しく装つてゐる。

華麗な木の葉が一片、馬車の中に舞ひ込んだ。

「色を見て眼が眩くらみさうになる事があつて？」と、お春が尋ねた。

おしまは、長く黙つてゐた揚句に、

「いゝえ。そんな事ないわ。ちつとも。」

「眼が眩くらむつていふのは、言ひ方がわるいかも知れない。でもまあ、そういふよりは仕方がない。私、色を食べたり、飲んだり、そんな中に寝たいとさへ思ふわ。もし、あなた樹になれたら、何の樹になる。」

おしまは、こゝろいふ風の問答には、大分馴れて來た。お春の御蔭で、おしまは、耳が明き、眼が見え、舌が動くやうに

なつたので、今の間に對しても、とにかく、應答が出来るやうになつた。

「私、花盛りの林檎の樹になる。うちの豚小屋の傍にある、うす桃色に咲くあの樹よ。」
お春は笑ひ出した。……おしまの返答は、いつも案外であつたから。

「私なら、そら、あそこの池の縁よちにある、真紅の楓になるわ。」といつて、お春は鞭で指した。「豚小屋のそばの林檎の樹よりも、餘計にもが見えるわけでしょ。林が見渡されるし、美しい姿見で、紅い自分の着物が見えるし、水の中に倒に生えてる黄や茶色の樹だつても見えるしね、私大きくなつて、御金が取れるやうになつたら、此の葉のやうな着物を拵らへるのよ。ルビー色の地薄のね、裾を長く曳く、へりの飾りのヒラ／＼ついてるのを。それに、樹の幹のやうか褐色の帯をして。だが、どこかに縁をいれなくては。緑りの下ばきツてあるかしら、下からチラ／＼、緑りの下ばきが出るやうにして、真紅の楓になる前に葉の色が緑だつたといふ事を分らせるの。」

「そんなの平凡だわ。私はね、白い襦子の着物に桃色の帯、桃色の靴下。青黒色の靴。それにキラ／＼金物飾りのついた御扇子を持つよ。」（以下次號）